

ふたなり剣士アマナと

四人の戦乙女

1

沢見独去

目次

第一章 魔人の呪い

1	摂政公の野望	6
2	裏切りの騎士団	25
3	マザラムの魔手	44

第二章 漆黒の魔道士

1	少女降臨	67
2	王の森	85
3	魔道少女マグヌーリア	105
4	はじめての女体	125

第三章 北へ

1	師匠と弟子	147
2	少女二人の淫戯	165
3	村	189
4	オーク討伐	214



アスレヤ

アマナの従士。ぺたんこロリ。召喚魔法を得意とする。十二歳。

アマナ

アーラム王国近衛騎士団所属。細剣と短刀の両刀遣い。二十二歳。

マグヌーリア

黒髪ロリ巨乳の黒魔道士。見た目は十三歳。

疾風の剣士の細剣、褐色の戦士の大剣、
それぞれの得物きらめくところ屍の山を築き、
敵の逃げ惑うこと、蜘蛛の子を散らすが如し。

亜麻色の髪の少女、竜を呼び、

漆黒の魔道士、地をも揺るがす災いをもたらす。

白銀の乙女、幾百の魔法を防ぎ、

三人の少女のもたらす戦禍、幾千の兵にも勝る。

アーレム永劫王の御霊よ、いざ御照覧あれ。

汝の遺志を継ぐ五つの星の戦乙女、ここに初めて集う。

第一章

魔人の呪い

1 摂政公の野望

アーレム王国首都、不朽玉座ましますメシエケールの夜は、万華鏡のごとく輝き、その偉容は大陸全土にあまねく伝わっていた。

街を取り囲む高い石壁。東西南北に四つの大門が設けられ、日のあるうちは開け放たれている。

そこを通るたくさんの旅人、隊商、異国の装いの旅芸人、いかつい冒険者……。街の中心には白く輝く砂岩でできた城が、周囲を圧してそびえている。二百年ほど昔、魔族と闘って彼らを永久に閉じこめるために、みずからを封印とした偉大なる永劫王アーレムが去って以来、空位のままの玉座と、王国を実質的に統治してきた摂政公が君臨する場所。

その優雅な城には、いくつもの尖塔が建ち並び、その天辺ではアーレム王国の緋色地に銀色の獅子の刺繍された旗がひるがえる。

その数ある中でもひとときわ高い塔は、「王妾の塔」と呼ばれていた。アーレム王の

治世よりさらに昔、王の側室が正妃の怒りを買って、すべてを奪われ、幽閉されたことにちなむのだそうだ。その側室は妃を呪いながら、ついに塔より飛び降りたという。以来、そこは誰にも使われていない。

そんな陰鬱な塔を見上げながら、アマナはそつとため息をついた。

彼女は二十二歳。

肩甲骨のあたりまでまっすぐに流れ落ちる金色の髪は、月の光にきらきらと輝いているようだ。整った細面の顔は鼻すじが通り、その茶色の大きな瞳が、理知的で優美な印象を与えている。

だが、そのやわらかな印象の顔立ちと、身なりは対照的だった。

武装している。

真っ白な絹のチュニツクを腰の太い黒革のベルトで締め、その下は緩いドレープを作って太ももの半ばあたりまでを隠している。その上には銀に金色の象眼の入った胸当てをつけ、背中に大きく銀獅子の紋章が刺繍された紺碧のマントを羽織っている。

左の腰には細身の片手剣が吊られている。両刃の刀身はまっすぐで、鞘は革製のシンプルなものだ。一方、左手で抜けるように右側の腹部にぴったりと装着された短剣は、刃が二日月型に丸く歪曲している。鞘には色とりどりの宝石が埋めこまれていて、



一目見るだけで高価なものだとわかる。アーレム王国を始めとした大陸南側の諸王国では、この先祖代々伝わる短刀が貴族の証しであつた。武官でも文官でも、正装時はこの短刀を身に帯びるならわしだ。

アクセサリーの類いは、右耳の上で金髪を留めている細長い四角形の髪留めのみだ。シルバーに水色と紺色の貴石が象嵌されている。それがかがり火に照らされて、金の髪とともにきらきらと輝く。

白いチュニツクの裾の下には、艶めかしい白い太ももが半分ほど見えている。膝から下の脚は、やわらかそうな黒い革のブーツにおおわれている。

アマナは短いチュニツクの裾と、むきだしになった太ももを見下ろし、再びため息をついた。

——裾が気になって、これじゃ、いざというとき、思いきり闘えないわね。

この軍装をするたびに、そう思う。

だがこの格好は近衛騎士団、軽装騎兵が城内ですべき正装であつた。

アーレム王国近衛騎士団は、軽装と重装の二つの騎兵分団に別れている。軽装騎兵は女性のみ、重装騎兵は男性のみが属する。他の常備軍とは違い、騎兵のみで構成され、歩兵も弓兵もいない。

首都メシケールと王城を守護し、王国儀礼にもかかわる近衛騎士団は、すべてが貴族の出身だ。美麗な威儀をもつて仕えるのも、いたしかたないことだった。

——それにしても。

アマナはその整った顔を、わずかにしかめる。

——こんなに太もみをさらけださなくても、いいのに。

気づかれないようにチュニツクの裾を引っぱりながら、彼女はとなりで身じろぎもせず立ち尽くす男をちらりと見る。

銀に、金の象眼の施された全身鎧を身につけ、腰には巨大な両手剣を帯び、真っ白なマントを羽織っている。もちろんそこには、アマナの紺色のマントと同じく、王国の標である銀色の獅子。

男の名は、マルジャーン。三十三歳にして、王国近衛騎士団を束ねる団長の職にある。その金髪碧眼の端正な顔は、今はいかめしく引き締められている。そのままの表情で横のアマナをちらりと見て、ささやいた。

「行くぞ」

「はい、団長」

城のあちこちではかがり火が盛大に焚かれ、闇を追い払っている。

その中庭を、二人は歩いて行く。

アマナは四年前、十八で騎士団に入団した。彼女の父親は長年、近衛団長を務め、数多くの武勇を残す人物だ。家は先祖代々、武をもつて王国に仕えてきた。当然、一人娘のアマナも、歩き始めた頃から武芸をしこまれた。受け継がれる血がそうさせたのか、あるいは彼女個人に才覚があつたのか、めきめきと剣の才能を開花させ、細剣術では、誰もかなうものがないほどの腕前になった。

——だけどそのお陰で、いい男は寄つてこないけどね……。

彼女は自嘲気味にひとり笑った。

おまけにアマナは、不正やいい加減なことを許すことができない自分の性格も、よく自覚していた。そのお陰で、騎士団の中でも浮いてしまっていた。

大陸諸国の中でも、アーレム王国は男女の恋愛が自由な国柄だった。女性ばかりの騎士団があることでもわかるとおり、女の立場も比較的高い。そんな中で、アマナは二十二になるまで、男を知らず、つきあつたことすらなかった。

——お父さま、ごめんね。

四年前、アマナが騎士団に入つたのを見届けるようにして亡くなった父の顔を思い起こす。無骨だが、優しい父だった。すぐあとに、母親もあとを追うように逝つてし

まい、彼女はひとりぼっちになってしまった。家を絶えさせないためには、伴侶が必要なのだが……。

アマナは厳めしい表情で横を歩く端正な男の顔を、ちらりと盗み見た。

マルジャーンのことを、密かに彼女は想っていた。今も横顔を見るだけで、胸がときめく。

——マルジャーン様……。

この気持ちを知っているのは、二年前から騎士見習いとして、彼女の身の回りの世話をする従士を務めてくれている十二歳のアスレヤだけだ。城へ出仕する直前の彼女とのやりとりを思い出して、唇の両端をかすかに上げて微笑んだ。

アスレヤの背はまだ低い。女性にしては背が高いほうのアマナの胸にも届かない。そんな小さな体を精一杯伸ばして、くるくるとよく動く快活そうなブラウンの瞳をめいっぱい開きながら、彼女は言い放った。

「アマナ様っ……男は、か弱いおなごに弱いものですっ……アマナ様も、マルジャーン様の前では、もう少し女らしく振る舞うのですっ」

「お、女らしく……?」

その場で飛び上がると、二つ結びにした亜麻色の髪がびよこりと揺れた。彼女は太



きくうなずいた。

「そうですっ……アマナ様には、女らしさが足りません……そしてもつと色っぽくですっ」

「い、色っぽく……?」

「そうです。チュニツクはもつと短くして、太ももを見せつけるのです……それからそれから、胸ももうちよつと、こういうふうに、見えるように……」

そう言いながら、軽装騎士団の正装をしたアマナの胸元を、銀の胸当てごと引っぱり下ろそうとする。

「きゃ。だめよ。恥ずかしいじゃない」

「そんなこと、ありません。アマナ様はアスレヤと違って、おっぱいが大きいんですから、もつと殿方に見せないとっ!」

自分の平らな胸をぺたぺたと両手で触りながら、アスレヤは言い募る。

この十二歳の少女は、北の国境に広大な領地を持つジョハラ辺境伯の三女だ。みずから騎士団に入りたいと志望した彼女は、二年前、メシエケールにやってきて、アマナの従士に任命された。

騎士団に入るには、こうして入団できる年齢である十八まで、団員の従士をして騎

士になる修行をする場合が多い。もともとアマナは、従士の経験なしで、入団試験に合格した数少ない一人ではあったが。

文字通りの辺境から出てきたばかりのうぶなアスレヤを思い出す。ほっぺたを真っ赤にして、かちかちに緊張してアマナの前に立っていた。

——それが、今では……。

彼女は苦笑する。

大貴族の令嬢のはずなのに、彼女には妙に世事に通じているところがあって、アマナのほうが教えられることも多い。本人は、田舎で市井の人々とともに育ったからだと言っていた。

ともかく、今ではまるで彼女のほうが年上であるかのように、お節介を焼く。剣の腕のほうは、からきし上達しなかったが。

ただ、彼女には魔法の才があるらしく、特に精霊や聖獣などを使役する召喚魔法が得意だった。アマナはいい師匠を見つけて、ちゃんと魔法を教わることを勧めていたが、騎士になりたいという本人は固く拒否していた。しかしその割りには、いい加減な術を使つてとんでもないものを呼び出したりして、何度も騒動を起こしていたのだった。

アマナは最近アスレヤが呼び出した精霊が、軽騎士団じゅうの女たちの下着を盗んだ騒動を思い出して、苦笑いした。

それからついでのように、胸当てをつけたみずからの乳房を見下ろした。

——もう少し、下にすらそうかしら。

実際にそこをひっぱろうとしたとき、横を歩くマルジャーオンから声がかかる。

「アマナ殿……アマナ殿？」

彼女は慌てて手を戻し、うろたえながら答える。

「あっ、はうっ……は、はいっ……団長」

自分でも顔が赤くなっているのが、はつきりとわかった。

そんな彼女の態度を華麗にスルーして、いつもと変わらない口調で彼が続ける。

「今宵の摂政公殿の御召しだが……どんなことなのか、アマナ殿は知っているか？」

名指しで摂政公に呼ばれることなど異例のことだった。しかも団長と二人っきりで。

彼女はでれていた顔をなんとか引き締め、首を振った。

「いいえ。マルジャーオン殿は、なにかお聞き及びですか？」

「いや。私もなにも聞いていない……」

城の中庭を抜け、玉座の間に向かう。重装騎士の警備兵が、重厚な鉄の扉の左右で、

みずからの団長にうやうやしく一礼した。本丸に入り、幅の広い階段を上がりきると、今度は巨大な一枚板の扉がある。その左右に、男女二組ずつの騎兵が、直立していた。二人は並んでその扉の前に立ち、声を上げる。

「アーレム近衛騎士団長、マルジャーン。摂政公のお召しにより、参上つかまつった」
「同じくアーレム近衛騎士団、アマナです」

警護の兵が敬礼し、音もなく木の扉が左右にひらく。

その向こうには、巨大な空間が広がっていた。天井は奥行きよりも高く、その中心はドーム状に盛り上がっていて、明かり取りの巨大なガラス板が、放射状にはめこまれ、壮麗な装飾で飾られている。

玉座の間だ。

何度来ても、その広大さと偉容に圧倒される。

いちばん奥は、部屋の幅全体にゆるい階段が十段ほどしつらえられ、奥に行くほど高くなっていた。そのいちばん奥の真ん中に、石でできた巨大な椅子がある。直線を基調とした武骨なデザインだが、あちこちに象眼されている貴石は、巨大だった。

永劫王アーレムの不朽玉座である。

彼が隠れてよりこのかた、そこに座ったものは誰もいない。

魔族が住むという地底界より湧き出た大軍勢が押しよせ、大陸を席卷した時、アーレム王は奴らの本拠地に三人の戦乙女を率いて乗りこみ、みずからを封印としてそれを押しとどめた。その結果、魔族は退けられ、平和が訪れた。それ以来、下級の魔物が辺境に出没することはあっても、軍勢を擁して暴れまわるということはなくなった。アマナは二百年前にそこに座っていた男を想いながら、冷たく固い不朽玉座の座面をじつと見つめた。

玉座の背後には王国の紋章の入った緋色のタペストリーが、壁をおおうように何本も天井から吊り下げられている。

アマナとマルジャーンは並んで、玉座の間を奥へと進んでいく。彼女にとっては、しよっちゅう警護に立ついわば職場のようなものだが、今回は摂政公の直接の呼び出しとあって、さすがに少し緊張していた。

不朽玉座より一段下がった右側に、なんの変哲もない木製の椅子が置いてあって、そこに初老の男が腰かけている。

真っ白な長い髪をうしろで束ね、鋭い眼光と鷲鼻が目を引き。金糸をふんだんに使った絢爛たる衣装を身にまとい、左手には黄金に様々な色の貴石を嵌めこんだ摂政杖を持つ。

彼はじつと無表情で、近づいてくる二人を見つめている。

アーレム王国十代目の摂政公。名をムフェルという。

アマナたちは階段の一段目の始まる直前まで進み、そこで揃って右膝を立ててひざまずき、頭を下げた。

二人の紺碧と純白のマントがふわりと広がる。

「アーレム騎士団マルジャーン、参りました」

「同じくアマナ、参りました」

黄金の杖が、こつりと磨き上げられた石の床に突かれる。

よく通る低い声が、伏せるアマナの頭上から降ってきた。

「よく来たな、二人とも。面を上げなさい」

顔を上げた彼女は素早くまわりを見渡すが、いつもはお付きの文官や、警護の騎士などが控えているのに、今は彼ひとりしかない。

「もつと近くへ」

ムフェルが、その骨張った手で招く。

二人は立ち上がり、彼の直前の段まで、緩やかな階段を上がっていった。またそこで再びひざまずく。

「実はな、折り入っておまえたちだけを呼び出したのは、このアーレムの将来にとって重大なことがらについて、意思を確認しておこうと思ったからだ……」

アマナはかしこまって、摂政公の言葉を聞きながら、疑問を覚えていた。

——騎士団長のマルジャーン様はともかく、なぜ私が……？

その疑問が顔に出たのか、ムフェルが彼女を見て、唇の片方を吊り上げてにやりと笑った。

もともとアマナはこの摂政公が、好きではない。もちろん、騎士団が護るべき最大の存在であり、敬意は払っていた。しかしそのなにを考えているのか底の知れない彼の目つきや、時々垣間見せるぞつとするような冷酷な表情が、本能的に嫌悪感をかきたてるのだ。それは、蛇や蜘蛛などを見る時の感覚と近い。

摂政公は王国の最高意思決定機関である「御前会議」のメンバーから互選で選ばれる。任期はなく、罷免するにも大きな障碍が存在する。「御前会議」の全会一致でないと、辞めさせられないのだ。だから一度、摂政公に選ばれると、王国の権力を一手に握り、国家運営に多大な責任を負うことになる。

ムフェルは五年前にその地位に登った。その際には、さまざまな暗闘が繰り広げられ、人死にまで出たという。それ以来、その有能さと冷酷さで王国を効率よく治める

いっぽう、黒い噂がいつまでもつきまとっている人物だった。

そんなアーレム王国最大の権力者が、その感情の宿らない目でじつとアマナを見つめる。

「アマナ……」

「はっ」

「なぜ自分が呼ばれたのか、わからないという顔だな」

彼女は簡単に感情を気取られたことを恥じる。顔が赤くなるのを感じた。

「いえ……そのようなことは……」

「よい。そう思っただけだから」

そこでムフェルは言葉を切って、ひざまずく二人の騎士を順番に見た。

「おまえたち二人は、この国で双壁の剣使いだ。だから、呼んだのだ……」

アマナは身を固くして、言葉の続きを待った。だが、本当は聞きたくなかった。嫌な予感が、胸の中をおおっていたからだ。

——きつと、摂政公は、私が聞きたくなかったことを言うだろう……。

それは確信だった。

そしてそれは、当たっていた。

「わしはもう、摂政公でいることに、飽き飽きしたのだよ」

間をたつぷりと取って、ムフェルは不朽玉座をじっと見つめた。まるでそこに座る主がいるかのように、殺意を込めた目で……。

「わかるかね。摂政公は、この国を動かす。わしの意味は、この国の意思だ。わしが王になって、ここに座ったとしても、なんの変わりがある？」

金の摂政杖で空位の王座を指し示しながら、ゆっくりとムフェルが言った。
となりでマルジャーンが腰を浮かす。

「それはっ」

それを手で制して、摂政公はしみの浮いた手を掲げる。

「まあ待て。わしはおまえたちに許可をもらおうと言っているわけではない。もうこれは、決まったことなのだよ」

マルジャーンの顔が厳しくなる。

「しかし、アーレム騎士団が忠誠を誓うのは、永遠の空位たる不朽玉座のみ。摂政公はその代理でしか、ありません」

騎士団長は、傲然とそう言い放った。

アマナもとなりで、その言葉に大きくうなづく。

「騎士団長のおっしゃるとおりです。ムフェル閣下がいかに思われようと、王位に登るのはこの国の掟に反します……」

その言葉に目の奥に怒気を漲らせながらも、諭すようにわざとらしい猫なで声で彼が言った。

「これはもう決まったことだと、申しただろう。二人に求めるのは、王たるわしに忠誠を誓うかどうかだ」

アマナは横目でとなりを見る。

彼女の恋する男は、齒を食いしぼり、怒気を漲らせていた。その銀の金属鎧におおわれた体が、こまかく震える。そのまま男をにらみつける。

「近衛騎士団は、承服しかねますな、摂政公閣下」

ムフェルの蛇のような目が、ゆつくりとこちらに向く。

「おまえもか、疾風のアマナよ……」

その目を見据え、大きく彼女はうなずいた。

「不朽玉座を脅かすものは、王国の敵。王国の敵は、騎士団が討つ。そうでありましよう、ムフェル殿」

アマナとマルジャーンは右膝を立ててかしこまったまま、顔を見あわせてうなずい

た。確固たる熱い意思が二人のあいだに通いあう。

騎士団長の体躯に剣を極めたものしかわらない静かな殺気が満ちるのを、彼女は感じた。それに反応して、自然に右手が細剣の柄に伸びる。みずからの体にも闘気が充満していく。

だが摂政公は平然と、その皺だらけの手であごを撫でた。

「ふむ。強情なやつらよの。わしがこれだけ下手に出ておるといいうに。言っただはずだ。おまえら個人に忠誠を求めている、とな」

鋭い眼光に怒気が溢れる。

摂政杖の先端を二人に突きつけながら、ムフェルは哄笑した。

「むははははっ……もうよいわ。頑固者め」

そして、高らかに玉座の間に声を響かせた。

「出会えっ！ わが騎士団よ！」

2 裏切りの騎士団

玉座のうしろ、タペストリーの陰から、十数人の人影があらわれる。

それを認めたとき、ひざまずくアマナは息を飲んだ。マルジャーンは出てきた彼らを鋭い目でにらみながら、悪態をつく。

「くそ。どうなってるんだ」

人影は、近衛騎士団の制服を着ていた。

その中の男女一組が、摂政公ムフェルの左右に控える。それ以外はそのうしろに並んで、直立不動になった。

摂政公の両側に立ったのは、軽重騎士団の両分団長だ。二人の男女の顔には表情はなく、こちらには目もくれずに、まっすぐ前を見つめている。

アマナとマルジャーンは、それぞれ自分の属する騎士団の仲間たちを、呆然と見つめた。

ムフェルが嘲笑う。

「言ったであろう。見てのとおり、もうすでに近衛騎士団はわしについた。あとはおまえたちを残すのみ……」

マルジャーンが雄叫びを上げる。

「おまえらっ！ 団長であるこの私を差し置いて、王国を裏切ったのかっ」
彼の手が、大剣の柄にかかる。そのまま斬りつけるかというほどの殺気を漲らせて、団員たちをにらみつけた。

ムフェルの左に立つ重装騎士分団長が、視線をそんな彼に移し、唇をゆがめて冷笑した。以前は王国とマルジャーンに忠実な、無口で山のように大きな男だった。彼は絶対的な忠誠を誓ったはずの上官を、虫でも見るような目つきで眺めた。

「……我らは新たな秩序に殉じることにした。団長殿にも、ムフェル王にひれ伏すことを、お勧めしますよ……そうすれば、この騎士団の末席を汚すことだけは、許してあげましょう」

「くっ……ふざけるなっ。この叛乱者めっ」

とうとう怒りに震えるマルジャーンは立ち上がり、その長大な剣を抜き放った。つられてアマナも細剣を鞘走らせる。

そこに右側に控える女から、鋭い叱責の声が飛ぶ。

「アマナ！ 分団長の命令です。すぐに剣を収めて、我ら軽装騎士団とともに行動しなさいっ」

もともとといけすかない女だった。王国でも有数の大貴族の家に生まれ、プライドだけは高い彼女は、アマナの剣の才能を妬み、ことあるごとに陰口をたたき、こっそりと嫌がらせをするような、そんな陰険な人となりだったのだ。

アマナは努めて冷静な声を出す。

「あなたこそ、騎士団長の言うことが聞こえないの？ 誇り高きアーレム騎士団の誓いはどうなったのかしら？」

右手で細剣を軽やかに突き出しながら、アマナは前方をにらみつけた。

彼女の顔が増悪にゆがむ。

「うるさいっ……おまえごとき小娘が、わたくしに指示するなんて、片腹痛いわ！」
ぴりぴりとした、一瞬で燃え上がりそうな空気が、玉座の間に立ちこめる。

それを感じていないのか、あるいはあえて無視しているのか、のんびりした声で、ムフエルが二人に告げた。

「そういうわけだ。寛大なる王は、おまえたちに最後のチャンスを与えよう。さあ私に与して、ともに新しい王国を盛り上げて行こうではないか」

大仰に彼は両手を広げた。

ともに剣を構えた男女は、素早く視線を交わす。

マルジャーンが、爽やかとも言えるような微笑みを浮かべる。

アマナはこんな時にも思いながらも、胸にときめきを感じている。

二人はうなずきあった。

彼が長大な剣を両手で持ち、隙なく構えながら、吐き捨てた。

「何度、言われても、受け入れるわけにはいきませんな、摂政公閣下」

そして背後に立ち並ぶ騎士団に厳しい目を向けた。

「騎士たちよ！ 団長として命ずる。今すぐ翻意して、私の指揮下に戻れ。我々が剣

を捧げるのは、不朽玉座のみ。栄光あるアーレム近衛騎士団の名を汚すな」

だが誰も動かない。

「ふん」

ムフエルが鼻を鳴らす。

重装騎士分団長が、大音声を響かせる。

「これほど国王陛下が慈悲を示してくださっているのに、この馬鹿者どもが！」

「……もうよい」

ムフェルは黄金の摂政杖の先端を石の床に打ちつけた。

「始末しろ」

その言葉を待ちかねていたように、立ち並ぶ騎士たちが一斉に剣を抜く。白刃が立ち並び、鈍く光った。

マルジャーンが横目でこちらを見、彼女にしか聞こえない声でささやく。

「できるだけ討ち取るぞ。できればムフェルの首もな」

「了解」

短く答えたアマナとマルジャーンは同時に動いた。

「うおおおーっ」

獣のように雄叫びを上げながら、銀の鎧でおおわれた体で、マルジャーンが摂政公のほうに突進した。両手剣を高々と頭上に掲げながら。

純白のマントがひるがえる。

彼は、速さを旨とする細剣術の使い手であるアマナが刮目するほどのスピードと、必殺の剣筋をもってムフェルに迫る。

だが二人のあいだに、巨大な男が瞬時に立ち塞がった。

重装騎士分団長の巨躯が、マルジャーンの剣を弾き飛ばす。

「なにっ！」

彼は驚愕に目を見開いた。

その時には、アマナはすでにその横を駆け抜け、細身の剣を摂政公に突き出している。目にもとまらない速さで、男の喉元に剣先が伸びていく。

キンツ。

かん高い澄んだ音を立てて、アマナの細剣が弾かれた。

分団長の女が、横から細剣を伸ばして剣筋に割りこみ、逸らしたのだ。

女がにやりと笑う。

「死ね！」

その声は増悪に満ちていた。

鋭く突き出された相手の剣先を体をひねって避けながら、アマナは内心驚いていた。

あまりにも速く、力強い。

何度も模擬試合で向きあってきた。彼女の实力はよくわかつている。

だが目の前の女は、それを凌駕している。

それも遙かに。

「くっ！」

歯を食いしばりながら、なんとか横から薙いできた剣に刃をあわせて軌道を変え、そのまま彼女のふところに飛びこむ。

女の眼が、真っ赤になっている。眼球も白目の部分もない。ただ血のように真っ赤だ。

ふところに飛びこんだ瞬間、剣を突き上げる。

それは顎を貫くはずだった。

だが真っ赤な眼で、彼女はにやりと笑う。

「遅いわ！」

それを待ち構えていたように女の体がのけぞり、剣が空振りする。

すかさず左手でアマナの胴当てをつかもうとしてくる。

素早く身を引き、さらに細剣を斜めに構えて次の攻撃に備える。

「おまえのせいで！ わたしはっ！ おまえのほうが身分が下なのにつ！」

そんな呪詛めいたことを叫びながら、彼女が迫ってくる。

その圧迫感も、常人のものとは思えない。

剣先が震えた。

「アマナ！」

マルジャーンの叫ぶ声が聞こえて、素早くそちらを見ると、彼が相手をしている分団長の大男の眼も、同じように赤く光っている。

「こいつらは、人間じゃないっ……化け物だっ」

うしろに立ち並ぶ騎士団の面々の顔も、まったく表情がない。

ぞくぞくとした感覚が背筋を這い上っていく。

それは、恐怖だった。

人の身に対してならば、誰であろうと負ける気はしない。

だが、彼らは人ではない。

輝く邪眼の赤い残像を虚空に描きながら、女が動く。

「今度こそ、死ねえっ！」

横薙ぎに常人を超えた速さで走った剣が、突然、方向を変えて喉を直指して伸びてくる。

避けるだけで精一杯だった。

剣先が肩をかすめ、白いチュニツクが破れて血がにじむ。

横ではマルジャーンが大男と鏑ぜりあいを繰り広げ、そして力負けしてよろめいた。すかさずそこへ男の大剣が振り下ろされる。

「マルジャーン様っ」

アマナは思わず叫ぶ。

かろうじて彼はその重い両手剣を避けた。

「くそっ……いったん退くぞっ」

「わかりましたっ」

体勢を立て直したマルジャーンが、真っ向から大男に向かっていく。

二人の大剣が火花を散らしてあわさり、すぐさま離れる。

アマナも右手を精一杯伸ばして、鋭い突きを女に浴びせた。

その時には左手で腰の短剣を抜き放っている。右手の突きが弾かれるのと同時にくるりと回転しながら、三日月型に歪曲した幅広刃の短剣で斬りつける。

手応えがあった。

「んはっ」

女の右の二の腕から血が吹き出す。

その時には、もうすでに短剣は腰の鞘に戻り、細剣のみを上段に構えて次の攻撃に備えていた。これが、アマナをこの国有数の剣の遣い手にしている、彼女の家に伝わる二刀を用いる剣技だった。

「今だっ」

横でマルジャーンが叫び、二人はきびすを返して、全速力で扉へと走り出す。二人のマントがひるがえる。

「うはははは！ 逃げられると思うかつ」

不敵に、狂気を宿して、摂政公が哄笑する。

そしてその言葉は真実だった。

忽然と、ほとんど黒に見えるダークブルーのローブを着た人物が、巨大な扉の前に姿をあらわした。フードを深くかぶり、人相はおろか、性別すらわからない。

その人物は大きく手を左右に差し出して、突進する二人の剣客の前に立ち塞がった。

「邪魔だ。どけえっ」

マルジャーンが咆吼し、両手剣を横に払う。

それにあわせてふわりとローブが揺れ、左右の手が握りしめられる。

魔法が発動した。

マルジャーンの突進が、見えない壁にぶち当たったかのように止まり、その顔が苦悶にゆがむ。

「くそっ」

濃い紫色に見える濃密なマナが、ローブの人物の両手よりマルジャーンに渦巻きながら伸びているのが見える。

「マルジャーン様っ」

アマナは叫び、フードに隠された顔めがけて、渾身の突きを走らせる。

「くくくっ」

フードの中の真っ黒な顔が嘲笑した。

その声は、女のものだ。

剣先が突き刺さる寸前に、女の体が移動した。それは体を動かしたのではなく、ただスライドするように体が平行移動した、としか言いようのない挙動だった。

剣先は空を切り、アマナは体勢を立て直して細剣を構える。

騎士団長は虚空に貼りつけにされたように動けず、苦悶の表情をさらに強める。

「きさまっ……マルジャーン様を、離しなさいっ！」

「できぬな。疾風のアマナよ……」

そうささやいた女の声は、小さく低い。

そのまま彼女は指を動かして、アマナを指した。口が呪文を詠唱しているのがうつすらと見える。

魔法が完成するまでに攻撃を加えようと剣を突きこむアマナをじっと見据えて、フードの中にやりと笑った。

速い。

これほどまでに速く魔法を組み立てる人間を、アマナは見たことがなかった。濃紫のマナが押しよせてくる。それは体にまとわりつき、行動の自由を奪っていく。両手が人ならぬ力で固定され、じりじりと頭上に持ち上げられていく。その途中で、愛剣が手から離れ、かん高い音を立てて石の床に落ちた。

「くっ……離せ」

騎士団でも双壁と称せられる剣士を同時に相手して、魔道士の女はやすやすと二人の自由を奪った。それは恐るべき力だった。

ゆつくりと彼女が目深にかぶったフードを外す。

下からあらわれたのは、年の頃は三十ほどの、妖艶な美女だった。真っ赤な髪が大きくウェーブして背中の中程まで流れている。

年老いた魔術使いを想像していたアマナは目をみはった。

至近距離まで近づいてきて、じっとアマナの目を見つめる。その瞳も髪の毛同様、真っ赤だった。同じく艶やかに赤い淫靡ささえ感じさせる口から舌が出てきて、ゆっ



くりと唇を舐める。

「んふふ……この国有数の剣士が、ざまあないわね」

妖しく女は嗤った。

立ち上がった摂政公ムフェルが、杖を掲げながらこちらへ歩いてくる。そのうしろには、騎士団の面々が従う。全員が目を赤く光らせている。

「よくやった。マザラムよ」

ムフェルが大仰に告げると、マザラムと呼ばれた女は、恭しく胸に右手をあて、一礼する。

アマナは頭上高々と両手を上げさせられ、手首を交差して魔法の縛めで拘束されている。体もがっちり固定されて、いくらもがこうとも無駄だった。

となりでは同様に、マルジャーンが見えないもので拘束されている。

摂政公がゆつくりと、二人に近づいてきた。その色の悪い唇の片側を吊り上げて、残忍に笑う。

「素直にわしの許に下ればよかったものを。愚か者め……まあ、よい。いずれにしても、おまえたちはわしの思うがままに動く人形になるのだからな」

それからゆつくりと女魔術師のほうを見た。

「やれ、マザラム」

「はっ」

また一礼してから、彼女はマルジャーンを見て、赤い瞳を光らせた。

「んふ。おいしそう」

舌が出てきて、みずからの真っ赤な唇を舐めまわす。

「このものたちのように……」

うしろであいかわらず目を真紅に光らせている騎士団の連中を手で示して、それから話を継いだ。

「……みずから恭順してくれば、術も簡単なのだが。おまえたちには、このわたくしが、特別念入りに術を施してあげましょう。んふふ」

妙にしなを作って、彼女はマルジャーンへ近づいていく。

「なにをする気だっ」

その迫力に押されるように、うろたえた声でマルジャーンが叫ぶ。

「あら。そんなに怖がらなくても、よくってよ……」

固定されたままの彼の銀の甲冑の胸のところに、つーつと指を這わせる。

「こんな無粋なもの……邪魔ねえ」

マザラムの口から高速詠唱の呪文が低く紡ぎだされる。それは聞き取れないほど小さく、一瞬で終わった。続けて彼女が指をパチリと鳴らすと、マルジャーノが身にもとつていた甲冑そのものが、煙のようにかき消えた。

「くそっ」

彼はそれに驚きで目を見開きながらも、すぐに憎しみのこもった鋭いまなざしを女に向ける。

「殺せ……おれはおまえたちのいいなりになんか、ならない」

「あらあ。その強がり、いつまで持つかしら」

それから齒を食いしばってその状況を見つめるアマナのほうに、ちらりと流し目をくれた。

薄手のチュニツクとズボンだけになったマルジャーノの身動きの取れない体に、淫らな目でマザラムは顔を近づけていった。ふっくらとした真っ赤な唇を丸くして、彼の首筋に息を吹きかける。

「や、やめろっ」

マルジャーノが叫ぶ。だが、そのくやしげな表情に反して、顔がみるみるうちに紅潮していく。

「きさまっ！　なにをしたっ」

アマナは衝撃をもって、恋する男の姿を見る。

薄いズボンの布を押し上げて、股間がものが起き上がっている。

くつつきそうなほど彼に体を近づけた魔女が、とろけたように妖しく微笑む。

「んふふふ。これは、なあに？」

マルジャーンの股間からそびえ立ったものを、女はズボン越しに指を巻きつけて握りしめた。

「おううつ……やめろおっ！」

騎士団長の引き締まった体が、震える。

マザラムの手が、彼の肉棒をゆっくりと撫でる。

そうやって手を淫らに動かしながら、彼女はみずからの肢体をおおうローブをするりと床に落とした。

漆黒の鎧で覆われた豊満で官能的な肉体があらわれる。

つんと前に飛び出した、巨大な双乳。

くびれた腰。

だがもつとも常人と異なるのは、その股間だった。

真っ赤な陰毛が萌え立つその股間には、違和感のあるものが、生えていた。それは、ペニスだ。

節くれ立った、カリ首の発達した巨根が、なぜか女の体から生えている。

だらりと力を失っていても、なおも大きい。

それをみずからの手でしごきながら、魔法使いの女はかぎりなく淫らに笑った。

「んふう。マルジャーンよ。おまえはそのイチモツで、わたくしを満足させるのだ」そして視線だけを、並んで拘束されているアマナのほうに向ける。

「アマナよ。おまえには、こちらをたっぷり使ってやるからな……」

妖艶な美女の股間から生えたペニスが、みるみるうちに力を得て凶暴に突き立っていく。

アマナは戦慄する。

だがマザラムのその淫靡な姿から、目が離せない。



3 マザラムの魔手

女魔道士がゆつくりとマルジャーンのズボンを脱がせていく。その下から、硬く勃起した彼の肉竿があらわになる。それは天を向いて屹立して、ぬるぬると淫らな液を垂らしながら、震えていた。

「くっ」

マルジャーンが顔をしかめて、短い声を洩らす。しかしそこには、姪楽の響きが隠されていることに、アマナは敏感に気づいている。

マザラムが、くるりとうしろを向く。張りのある尻を突き出して、マルジャーンの前で見せつけるように左右に振る。その肉感のある尻肉のあいだには、妖しく光る割れ目が垣間見えた。

マルジャーンの目が、焦点を失っていく。なにかに抗うように歯を食いしばるが、その努力は強大なる女の魔法の前では、なんの意味もなさない。

ゆつくりとうしろむきで尻を突き出したまま、女魔道士は騎士団長の精悍な肉体へ

と、近づいていく。

「やめろーっ」

アマナは叫んでいた。その声が、他人のような、どこか遠くから聞こえてくる気がした。

マザラムの豊満な桃尻が、マルジャーンの剛直に当てられる。

「んふう。入れるわよ……」

いやらしくささやいて、妖艶な美女はくいつと尻を動かした。赤黒い肉棒が、真っ白なマザラムの尻の奥にめりこんでいくのが見える。あっという間にその長大な竿が、彼女の女穴の中に根元まで埋まった。

「ンゴオオオーッ」

マルジャーンが人ならぬ声を上げる。

その体が跳ねる。

「マルジャーン様っ！」

懸命の呼びかけにも応えずに、彼は腰を前後に動かし、肉棒をマザラムの中へと出し入れし始める。最初はゆっくりだったその動きは、咆吼とともに速くなっていく。

「んはああっ……いいわあっ。マルジャーンのおちんぽ、感じちやううう♥……あは



ああああん」

立ったまま男根を尻から迎え入れたマザラムは、細くくびれた腰を妖艶に振って、淫靡な声を上げる。

わずかに前に傾いた上半身で、たわわな果実のような乳房が、ゆっくりと重量感たっぷりにたゆたう。

そして、その股間では、燃えるような赤毛の恥毛から生えた兇悪なペニスが、筋を浮き上がらせて怒張して、マルジャーンの突きこみにあわせてぶらぶらと揺れている。魔女はそれをみずからの手でゆるりとしごきながら、男の突きこみにあわせて淫らに腰を振る。

「あああっ……いいっ……もつと、激しくしなさい、マルジャーンっ……あふううんっ、んはっ♥」

いつのまにか摂政公ムフェルが、すぐ側まで来ている。じつとマルジャーンと両性具有の魔道士の、卑猥な交わりを見つめ、それからその濁った目をアマナに向けて、好色そうに光らせた。

「ふふふ。疾風のアマナよ。おまえのこの美しい体を、たっぷりと穢してやりたいと、以前から思っていたのだよ」

男の手が、両手を上で固定されて身動きのできない彼女の胸に伸びる。

「や、やめなさいっ」

チュニツクの布の襟元から、ムフェルの骨張った手のひらが潜りこんでくる。それはゆつくりと、銀の胸当ての下へと進んでいく。

アマナの全身に鳥肌が立った。

その手にぐいつと力が入って、右の胸のふくらみを握りしめられる。その手のひらが蠢き、乳肉が変形する。

「くっ……」

いくら振りほどこうとしても、体はまったく動かない。

嗜虐を色濃く瞳に宿して、その老人は節くれ立った指を動かして、アマナの乳房をなぶっていく。

「んははは。よい感触だぞ、アマナ……」

「や、やめなさいっ……くっ」

顔をゆがめながらも、アマナはすぐとなりで立ったままつがう二人を見てしまう。マルジャーンの様子がおかしかった。女魔道士に突き入れるたびに上げる雄叫びは、どんどん人ならぬものとなり、苦しそうに表情がゆがむ。



「ンガッアア！　グゴウウウツ……グウウウウル」

それをまったく気にすることなく、マザラムは腰をくねらせている。みずからの手で豊乳を揉みしだくと、指先がずぶずぶとやわらかな肉に埋もれていく。

「はああああん♥……んくううつ……もつと突きなさいっ……そうっ。いいわっ……あああああーんっ♥」

ムフェルの手が、執拗にアマナの胸を責めてくる。

彼女は必死に身をよじっているが、男の手はどんどん奥へ差しこまれてきて、乳肉をつかみ上げる。そのままムフェルの指先がきつく乳首をつまむ。そこから、びりびりとしびれるような感覚が走る。

「くっ……や、やめなさい……」

鼻息も荒く彼が喘う。

「どうやら疾風のアマナも、おっぱいは感じるらしいな……ほらほら。乳首が固く勃つてきたぞ」

「くっ……やっ……んんっ……」

となりの雄叫びがさらに高くなる。

マルジャーンの手はもう自由になっている。女魔道士のくびれた腰を両手でつかみ、

激しく腰をグラインドさせながら、上体を反らし天を仰いで大きな口をあける。

「ウガアアアアアーツ。ウグルウ……」

「あはああんっ……そうよ、マルジャー、わが奴隷よっ……わたくしの中に、そのたぎった子胤をたっぷり注ぎこみなさいっ！ あああああんっーっ♡」

さらに腰が速度を増す。

「ンゲグウウル……ンガアアアアアア！」

マザラムの妖艶な体が浮き上がるほど、背後から立っただまま腰を突き上げ、最大の咆吼とともに腰を震わせて、彼は精を放った。

磁器の如く真っ白な魔道士の肌が、朱に染まる。そのまま淫蕩に顔をゆがませて、マザラムは悦びの声を響かせる。

「んくうううっ。はうっ♡……わたくしのおまんこの中に、マルジャーの熱いお汁がたっぷり出てるわっ……あつくううん……」

びくびくと体を震わせて、マルジャーが何度も射精する。

そして肉茎の先端から精液をほとばしらせるたびに、彼が変わっていく。

それは劇的だった。

目全体が、次第に真っ赤に染まっていく。よく鍛えられて褐色だった肌が灰色にく

すみ、癡猛に筋肉が張りつめていく。背丈も体の厚みも、ひとまわり以上ふくらんだように見える。

マルジャーンだったものが叫ぶ。

「ウグルグルグガア……」

その目は、白目と黒目の区別なしに真っ赤だ。

「マルジャーン様っ！」

アマナはみずからも胸を老人になぶられながらも、声を限りに叫ぶ。

だが、その声が届くような存在では、もはや彼はなかった。

もう人ですらない。

マザラムの妖艶な尻へいまだ肉棒を突き入れ、さらに腰を激しく動かしている。

「んはああんん……いいわああっ……マルジャーン、すてきよう♡ ああん……」

「グアアアアア！」

奇怪な叫び声を不朽玉座の間に響きわたらせ、マルジャーンは二度目の射精の直前、みずからの肉棒を抜いた。

それを見て、アマナは目を見張る。

あまり男のものを彼女は見たことがない。それでもその異様さはわかった。真っ黒

に変色し、でこぼことあちこちに丸い突起が突き出している。カリ首はまるで逆棘のように兇悪に張り出している。

その先端から、真っ白な液体が噴出した。

そのどろどろしたマルジャーンのザーメンは、ひとかたまりになつて弧を描いてアマナのほうへ飛んでくる。

彼女の胸元に手を突っこんでいた摂政公ムフエルが、意外に機敏な身のこなしでそれを避けた。

「くっ」

その白濁したかたまりが、銀の胸当てにぬるりとこびりつく。ひどく生臭い匂いだ。だが、それだけではなく、その男の粘液は、みずからが意思を持っているかのように、ぬるりと蠢いた。

全身の毛が逆立った。

それは胸当てから、まるで生きているかのように、下へとずるずると降りていく。

「やめろっ」

アマナが身をよじり、叫ぶ。

その白いかたまりの目的地がわかり、さらに彼女は脚を動かして抵抗した。

それは確実に股間を目指して、這い寄っていく。
うねうねと全身を気味悪く蠢かせて。

「やめてーっ！」

もうアマナの口から漏れるのは、悲鳴だった。

それを見ていたマザラムが、にやりと笑う。

「あらあ♥ マルジャーンのザーメンちゃんは、アマナがお気に入りのようねえ……
このまま、孕ませちゃおうかしら……んふふふ」

「お、お願い……なんとかしてえっ……」

叫ぶアマナの下腹部に、もうそのべたべたするものはこびりついていて。そのまま触手を伸ばすように、目的地に迫っていく。

布越しにも感じるその気色の悪い感触に、彼女は全身を震わせる。

「あはははは」

女魔道士が哄笑した。

「このままザーメンに犯されるのを見ていたい気もするけど……孕んじやったら、マルジャーンみたいに、わたくしの奴隷にできないわねえ……」

口が詠唱を紡ぎ、ぱちりと指が鳴る。

とたんにその白濁したものは力を失ってぼとりと大理石の床に落ち、そのまま小さくなって消失した。

アマナは体の震えが止まらない。

ゆつくりと目を妖しく光らせながら、魔道士マザラムが全裸で近づいてくる。その股間からは赤黒いペニスがそそり立ち、ぬらぬらと濡れて光っている。

「く、来るなっ！」

「んふふ。男はわたくしを犯して、女は犯されて、しもべとなるのよ……」

ゆつくりとした歩調で女が近づいてくる。

いまだ目に見えない拘束具に囚われているアマナの目の前に来て、淫らに微笑み、真っ赤な唇を舌を出して舐めた。

「こんなかわいいアマナちゃんを犯せるなんて、役得ねえ♥」

「くっ……やめろっ」

横あいから摂政公が、その老いた体でしゃしゃり出てくる。

「わ、わしにも、こいつに入れさせてくれっ……以前から、このぷりぷりしたケツに突っこみたいと思っていたのだ」

「あらムフェル様。もちろんでございますわ……ただ、わたくしの術を先にさせてく

ださいな。この術は、乙女のほうが、効果がありますので……」
彼女がその豊満な体をぴったりとくつつけてくる。

「ねえ、疾風のアマナ……ふふ」

息がかかるほどの至近距離で、女魔道士はささやいた。

「や、やめろ……」

食いしばった歯のあいだから、アマナは声を絞り出す。

「んふふ。摂政公閣下……いえ、もう国王陛下ですわね……におかれましては、この疾風のアマナがわたくしの奴隷になったあと、心ゆくまでこの肉体を味わわれてはいいかが」

「むふ」

ムフェルの脂ぎった顔の中心で、鼻の穴がふくらむ。

「いや。うむ……それは楽しみだのう」

横から彼の手が伸びてきて、再びアマナの乳房をまさぐる。それに耐える彼女の清らかな顔を見て、ムフェルがにやりといやらしく笑う。

正面では女魔道士が、その股間から屹立したペニスを誇示するようにしながら、手のひらでゆつくりとアマナの体を撫でていった。

「やめないかつ……殺せつ……いつそ、おまえなんかの奴隷になるくらいなら……」
アマナは舌を歯のあいだに挟み、一気に噛みちぎろうとする。その刹那、再び魔法が発動して、顎が固定される。見えない猿ぐつわが、口をおおっていた。彼女の口は半開きになったまま、もう言葉さえも出ない。

「んんーっ」

「だめよう……あなたには、まだまだ、やってもらうことがあるんだから……それに……もうそろそろ、気持ちよくなってきたのではなくて？」

言葉のとおり、マザラムの手のひらが撫でまわしたあとが、じんじんとうずくように熱を持ってくる。そこからたまらない快樂が押しよせてきた。

「んあんんっ」

口から、甘い声が漏れてしまう。自然に腰がくねり、固定された口の端から唾液が垂れていく。

淫らに濡れた瞳で、マザラムがじつとそんな彼女を観察している。

「あは。感じてきたようね……じゃあ、ここはどうかしら？」

魔道士の手が、銀の胸当てに触れる。その瞬間、乳首が固くそそり立ち、電撃のよ
うな甘美がアマナの体突き抜けていく。



「んはっ……むんんんっ」

「あらあ。おっぱいを感じるんだ……かわいい」

マザラムが赤く長い舌をだらりと垂らす。それは彼女の顎を越えている。人間ではありえない長さだった。

その舌が起き上がってきて、アマナの怒りと羞恥で桃色に染まった頬を、ぺろりと舐める。

「……おいしい♥」

彼女の触るだけでたまらない快楽を与える手のひらが、ゆっくりとチュニツクの上から、引き締まった腹を撫でる。

「アマナちゃんのおま○こ、どうなってるのかしら？」

「んんんーっ」

悲痛な叫びを上げるアマナを完全に無視して、マザラムの手が股間に伸びていった。ひらひらと襷が入って広がった短いチュニツクの裾をめくり上げ、その下にはいたコットンのインナー用の短ズボンと、さらにその中の下着を一緒に脱がせていく。

「むんんんーっ」

必死に体をくねらせてそれに抵抗するが、あつさりとその小さな布たちは、形のい

い美脚を通って、下に落ちていく。

魔道士は全裸で巨乳をたぷんと揺らしてしゃがみこみ、アマナのチュニツクをまくってそこをじつと観察する。うつすらと菱形に萌える恥毛はまばらで、輝くような金色だということもあつて、奥の割れ目が透けて見えそうだ。そしてその奥には、まだ男を知らないピンク色の秘裂が、ひっそりと息づいていた。

「あはん。かわゆい……」

マザラムは生き生きとした目で、アマナのスリットを眺め、それからぺろりとその人間離れた長い舌を出した。その細く尖った先端が、金色の恥毛から菊穴のあるところまで、股間をねつとりと舐めまわしていく。

「んんんんんんーっ！」

アマナは見えない口かせをはめられたまま、うめき声を上げる。その中には確実に、彼女の意味に反して、快樂の成分が含まれていた。

突き上げるような絶美の官能が、股間から体の芯を突き抜けていく。

「んふ。もうアマナちゃんのおま○こ、べちよべちよじゃないの」

舌を突き出しながら、女魔道士は器用に言葉を発音する。

割れ目のあいだにこじ入れるように、固く尖ってざらざらとした舌が侵入してくる。

舌はまるで別の生き物のようにぐねぐねと動き、膣の入り口をたつぷりと刺激した。そのまま突き入れられそうな恐怖を感じて、アマナは悦楽の中に底知れぬ恐怖を感じる。その両目からは、清らかな涙がこぼれ落ちた。

舌先が処女膜を探るようにつつく。

「ん？ やっぱり思った通りアマナちゃんは、処女ね」

しゅるしゅると音を立てて、長い舌がマザラムの口の中に戻っていく。そのまま真つ赤な口をゆがめて、嗜虐的に女が笑った。

立ち上がって、ゆがんだアマナの顔をじつと見つめる。

「んーん。どうしようかしら……」

横で食い入るようにその女同士の淫靡で一方的な陵辱を眺めていた摂政公が、じれたように口を出した。

「どうしたのだ、マザラムよ。まだ術は終わらぬのか？」

「陛下。わたくしは、少し悩んでおります。このわたくしのおちんぽを、このアマナの処女まんこに突っこんで、マルジャーンと同じように奴隷としてもよいのですが……」

その真つ赤な尖った爪の指先を、顎に当てて、マザラムは首をかしげる。

「こーんなに、かわいらしい娘が」

そこまで言つて、人間にあらざるものに姿を変えたマルジャーンのほうをちらりと見て、言葉を継いだ。

「……あんなふうになつちやうのも、おもしろくないしねえ」

摂政公ムフェルが、不審そうに聞く。

「だったら、騎士団の他の連中のようにしたらどうなのだ？」

「それは無理なのです……かの者たちは、みずからの意思でムフェル様に仕えることを選んだ者。それを拒んだ輩はすべて殺しました」

それを聞いていたアマナの頭にまた血がのぼる。怒りでその血が沸騰しそうだ。血走った目で、マザラムをにらみつける。

「あら怖い♥ だけど、アマナちゃんは、そうはいかないのよねえ」

最後は独り言のようにそうつぶやき、それからうなずいた。

「うん。やっぱり、こつちの方法にしましよ。ちよつと大変だけど……」

いたずらっぽく瞳を輝かせ、即座にマザラムは呪文詠唱に入る。

今までアマナが見たことがないほど一瞬で魔法を完成させてきた彼女にしては、長い詠唱だった。

基本的に魔術の威力や複雑さが増すと、呪文も長くなる。

つまりこの魔法は、とてつもないものだ。

莫大な濃紫のマナが彼女のまわりを渦巻く。

呪文のしめくくりを魔道士は朗々と唱える。これもまた、みずからの意思を物理法則を超えてマナによつてかなえる、高位魔法には必要なことだった。

「我とともに神々の領域をもてあそぶ者よ神々の直裁を超えて双性雌雄陰陽相克の具有を顕現せしめよ！」

呪文が始動する。

まばゆい光とともに、濃密なマナが体を取り囲む。

それとともに、えもしれぬ快楽が体を暴れまわり、彼女は生まれて初めての、極めて純度の高いオーガズムに達していた。

いつのまにか消え失せた見えない猿ぐつわから解き放たれて、アマナはかん高い声で鳴いた。

「んはああああああんっ……だっめええええええっ！ んくうううんっ」
肢体がびくびくと引き攣り、膣穴からは熱い愛蜜が噴き出す。

それとともに、アマナはみずからの体の異変を感じていた。股間の敏感なクリトリ

スが、常ならぬ力によつて、肥大していく。

「んああああんんっ……やめてええええっ……いやあああああああああ」
びくりびくりとアクメの攻撃を受けながら、腰を淫らにくねらせて彼女は叫んだ。
呪文が成就した。

ギュウウンというような音を立てて、マナが収束していく。

肩で息をする全裸の魔道士マザラム。

「ふう。さすがのわたくしでも、疲れるわね」

マナの霧が晴れ渡ったそこには、見えない拘束具で両手を吊された女騎士のぐったりとした姿が浮かび上がる。

その股間には白いチュニツクの短い裾を持ち上げて、まったく男のものと同じペニス
が、突き立っていた。赤黒く節くれだつて、そして大きい。

うつむいてそれを見たアマナが息を飲み、それから悲鳴を上げた。

「いやあああああーっ！」

